●特集・さよならを日本に

「子どもを抹殺します！」

福祉〝ソチ〟へ体当りする保母と少年たち

篠山　豊

「伸愛に帰して」と，市に訴える子ら　撮影　福島菊次郎

伸愛学園
いちばんおもしろい
いちばんおもしろい
学園
どこの学園よりも
たのしい学園
私は伸愛学園が
いちばんいい
（小学五年・寺尾弓子）

〝ソチ〟変更

私が、横浜の児童養護施設・伸愛学園を訪ねたのは、火事の翌日であった。焼け跡には、男の指導員・保母さんたち職員八人と、駆けつけた卒園生数人がいるだけで、こどもの姿はなかった。

火事は、前日早朝に起きた。四十二人のこどもたちは、保母さん付きそいのもとに、市の児童相談所へ収容された。だが、昼すぎには、園長兼務の社会福祉法人理事長と、市当局との話し合いで、県内の他の施設へ、こどもたちを分散することが決まってしまった。こどもやこどもの親はもちろん、保母さんたちにさえ、ひとことも相談はなかった。まさに電光石火の子捨て――ソチ変更であった。

ソチとは、措置である。公式の役所ことばだ。しあわせ薄いこどもたちを動かすことを、「ソチする」という。児童相談所から、ある施設へ送りこむことや、施設で反抗したという理由で、教護院へ回すことなどが、それだ。こんどのばあいは、「火事に伴うソチ変更であり、永久ソチ」であった。

こどもの生活費や職員の給与など、養護施設の運営費は、国と自治体からおりる。これをソチ費という。ソチする、ソチ変更、ソチ停止、ソチ費。すべてが措置である。とても人間が人間に使うことばとは思えない。だが、こんなわけのわからないことばを使って、実体を不明確にしておくことが、いまの日本の福祉政策の実体なのであろう。私にはそうとしか思えない。

火事の日の夜、横浜市のソチ本部である児童集配センター、いや、いい間違えた。横浜市の児童相談所前には、クルマがずらりと並び、県下十一の養護施設の職員が集まった。こどもを引き取りにきたのだ。こどもたちは不安に泣きさけび、保母さんたちは必死の懇願を繰り返した。焼け残り部分で生活を続けさせてくれと。しかし逆に、こどもを説得することまで要求された。

保母さんたちは、この夜のことを、「人さらいにこどもをさらわれるようだった」「焼けた倉庫の品物を、別の倉庫へ移すみたいだった」と形容する。きょうだいバラバラにされた子だけではない。ふだん暴れん坊で、彼女たちが手を焼くこどもほど、激しく泣いたという。

翌日、焼け跡でみる保母さんたちは、薄汚れたまま、疲れきっていた。それでも、体を引きずるようにして、こどもたちの焼け残り衣類を、拾い集めていた。洗たくして届けに行く。その時、あの子たちに会える。いまは、その喜びへの期待だけが、彼女たちの心を支えているようだった。

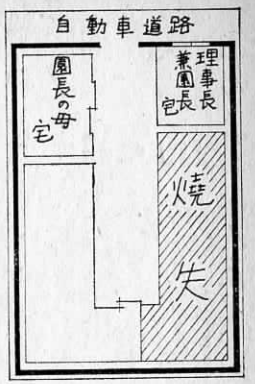
一人の保母さんが、自分の受け持ちの部屋跡へ案内してくれた。半焼けの辞書やズボンを拾い上げながら、その持ち主のことを、独りごとのように語る、「こどものいない学園は、学園じゃないわ。ただの焼け跡よ」。彼女は、つぎに自分たちがソチ停止されること――首を切られることを予見しているのだ。私は返事に窮した。

「あの子たちは、逃げてくればいいのよ。いいえ、きっと逃げてくるよ」。思いもかけぬことばに、私は衝撃を受けた。私の頭の中にあった「保母」のイメージが、音をたてて崩れるのを覚えた。彼女たちは、「管理人」ではなかったのか。乳飲み児を連れさられた母親、という感じとも違う。引き裂かれた恋人が駆けもどってくるのを、ひたすらユメ見る女。私にはそう見えた。この人たちは、こどもとの生活にのめりこんでいる、と。だが、その「のめりこみ」の実体を、ほんとうに理解できたのは、ずっとあとになってからである。

園長逃亡

彼女たちの二つの予見は、まったく正確であった。破れゾウキンをバケツへ捨てるように、解雇通知が届いた。そして、理事長兼園長は逃亡してしまった。理事長兼園長は女性である。創設者だった先代の後妻の連れ子だ。未亡人である母親も理事である。書記という名目で、ソチ費の中から、給料を受け取っている。残り三人の理事は、ただの名誉職なのだろう。「知らぬ存ぜぬ」で、交渉相手になる気もないし、能力もない。

伸愛の火事を、東京の新聞は、小さく、「全焼」と報じた。しかし、正確には、園舎は半焼ないし五分の三焼である。同じ敷地内に、



二つの住宅が無キズで残っている。二階家が園長兼理事長のもの、平屋がその母親のものだ。これだけ焼け残っているのに、どうしてこどもを散らさねばならぬのか、再建までの仮り住まいならば、十分間にあうではないか。見舞いや支援にくる人のだれもが、不思議に思う。

そして次には、「なるほどね」と合点してしまう。略図を見てほしい。理事長兼園長宅は、園舎にシリを向けたかっこうで建っている。道路側に玄関が開いているだけで、園の方向には、格子つきの小さな台所窓があるだけだ。逃亡者は、ふだんここで事務をとっていた。園に用事がある時は、いったん自動車道路に出てから、あらためて園の門をくぐり直さなければならない。「火事だ」という時でも、もちろんそうだ。「こどもがきらいだったのかなあ」と、だれもがいう。

自由化要求と報復

伸愛では、四年前、在園生による自由化要求事件が起きた。外出禁止を解除すること、夜九時の就寝時間を延長すること、弁当のおかずを改善することの三要求だ。どうして施設の子は、学校友だちの家へ遊びに行くことも許されないのか。どうして九時になると電気を消され、声を立てるとなぐられるのか。中学高校の在園生には勉強する自由もないのか。リンチと懲罰的作業と。卒園生が語る過去の伸愛はすさまじい。(5号、「確かな反乱」トンキーたちの発言を読み直してしほい)

彼らには、「送り」の脅迫がつきまとった。教護院送りのことだ。本人はもちろん、親の了解も必要としない。一人の人間の決定的な運命が、園長とか理事長とか呼ばれる人物の独断に、ほとんど委ねられていたのである。家庭の崩壊したこどもたちを、犯罪予備軍と想定したうえでの「収容所」みたいだったと、彼らは説明する。

激しい交渉を重ねたすえ、三要求は通った。しかし間もなく、リーダー三在園生のソチ変更——教護院送りと、彼らを助けた指導員の解雇という形の仕返しがきた。だがこれも保母さんたちの努力で撤回させた。この時から、こどもと保母さんたちの生活は見違えるほど明るくなり、反対に理事長兼園長側の態度は、陰にこもるようになったという。火事—子捨て—首切りという、世間の常識では考えられぬ蛮行も、この時胚胎していたのである。

子どもの意思を抹殺します

保母さんのもう一つの予見も、現実のものとなった。理事長兼園長は逃亡し、市へ交渉に行っても、市側は、この「こどもにさわったこともない理事長兼園長と、こどもの名前も顔も知らぬ肩書きだけの理事」(職員・卒園生の話)で構成する理事会の決定がないかぎり、再建の望みのないことを繰り返す。火事から一か月半、保母さんたちの苦悩が頂点に達したある日、四人のこどもが、分散先から焼け跡へ、脱走してきたのである。この子たちは、その日のうちに引きもどされた。しかし、これを境に、卒園生たちのエネルギーが爆発する。

卒園生は、火事の日から、姿を見せていた。保母さんたちのボディーガードを勤めたり、使い走りをしたり。毎日、夜も昼も続く職員会議——なんの進展も見いだせない会議を、

じーっと辛抱強く待った。お茶をいれ、晩飯のしたくをしながら……。そして日曜日には、手分けして、散らされたこどもを訪ねていた。

逃げ帰った四人のこどもを前にして、職員会議は混乱した。こどもたちを、このまま住まわせよう。それを学園再建の突破口にしようとする指導員、保母さん。それを「危険」とする側とに。暗くなったころ、収容先の指導員が、血相変えてやってきた。疲労困ぱいした保母さんや卒園生を前に、この指導員は大声をあげた。「この際、私は、こどもの意思を抹殺します」「こどもを抹殺します」「抹殺します」。廊下に立っていた私の耳に、抹殺ということばが、何回もとびこんできた。私は戦慄した。行きがかりと、感情の高ぶりはあろう。引き取った側の立場もあろう。だが、養護施設に働く人間が、口が裂けても吐きだすことばではあるまい。「こどもを抹殺する」とは、養護そのものの否定であり、養護施設で働く「おのれの抹殺」ではないのか。私には、この指導員に、悪魔が乗り移ったのだとしか、思えなかった。

「あの晩、伸愛では、乱交パーティーが開かれていた。その時のタバコが、火事の原因だ」というウワサが、火事のすぐあと、ほかの施設関係者から流れてきた。実際は、中学二年の男の子が、寝床の上で、起き上がりこぼしを作ったのが原因だ。タマゴの中身を抜いて、カラの底へロウを垂らしこんでいて、眠ってしまった。フトンが焦げた。自で分消して、別の部屋の押し入れに隠した。しかし完全には消えていなかった。明け方、それが火をふいたのだ。

伸愛の焼け跡へかよい、ほかの施設や行政の内情をのぞき見るにつれて、私は、こういう福祉関係の社会が、閉鎖された、なんともいいようのない隠微な世界であることを知った。こどもの生活費とか、学園費とかいわずに、ソチ費というのは、「こども置き屋」の性格を、一部認めるためではないか、とまで疑いたくなった。

私は、ほかの施設経営者が、伸愛の存在をけむたがり、恐れる気持ちは、十分理解できる。四年前の自由化要求事件いらい、伸愛で実践されてきた養護の実体は、彼らのイメージに納まりきらぬものがあろうからだ。人間の尊厳とか、自由とかいうものを、乱交パーティーにしか具象化できないのであろうから……。だが、この「抹殺者」のように、施設で働く指導員や保母の相当数までが、同じ状態にいるのは悲しい。四人のこどもを引き立て、ふんぞり返って門を出て行く「抹殺者」の後姿を見ながら、私は、旧帝国陸軍を思いだしていた。自分も貧しい農家の出でありながら、同じ貧しい農家出の兵隊をなぐり、いじめていた下士官を。

男の誓いはマタンキ団

別れぎわ、四人のこどもは、卒園生の胸の中で泣いた。卒園生たちの手が何本も伸びた。前後左右から、こどもたちの頭や肩をたたいた。「ああ、きょうだいなんだなあ」。ぼんやり眺める以外、私にはすることがなかった。玄関の内側では、保母さんたちが、声を押し殺し、肩をふるわせていた。

この夜から、卒園生の態度が、ガラリ変わった。静かに待つ存在ではなくなった。在園の男子高校生三人(彼らは、分散先へ寝に帰るだけだったが、やがてそれもしなくなった)を含め、十人くらいが、あり金をはたいた。一万数千円にしかならなかった。彼らは、これを基金に、「伸愛学園再建委員会」をつくった。四年前の自由化闘争のリーダーであり、あやうく教護院送りをまぬがれたマンボが、再び、委員長に推された。トンキーが副

委員長格である。マンボはボーリング場内のスナックのバーテン、トンキーはベンキ工。ともに十八歳である。

再建委は公称。彼らは、「マタンキ団」と自称した。一夜のうちに、焼け残りの白壁が、すべて、マタンキ団という字でうまった。「死ぬもマタンキ、生きるもマタンキ」「男の誓いはマタンキ団」なのだそうだ。私は、はじめ、マタンキの意味がわからなかった。ある日、敷きっぱなしの彼らの寝床の上のマンガをめくって、意味を知った。私はマタンキ団にかかわりたくなった。「マタンキ団の準会員にしてほしい」。恐る恐る申し出た。マンボは、威厳に満ちた顔で答えた。「正会員としてお迎えします」と。だから、私はいまでも、正規のマタンキ団員である。そして、それを、生涯の誇りに思う。(注。マタンキの意味を、どうしても知りたい方は、マンガ『少年ジャンプ』を買って、「トイレット博士」を読んでください)

マタンキ団の片割れ

彼らは、何もいわずに、焼け跡を片づけはじめた。保母さんを引きずって。焼け残り部分を補修して、仮り住まいをつくり、こどもたちを呼びもどすためだ。飛鳥田市長に強訴したとき、市長が返したことば、「やみくもに再建、再建いわず、仮り住まいになる場所を、キミたち自身で見つけてこい」を頼りに……。

ハタチ前後の七人の卒園生が、次々に職を捨てていった。夜昼ぶっ通しの労働のためだ。朝起きる。何も食べずに、午前中の仕事にかかる。昼は、前夜の残り飯とミソ汁でおじや。それもなければ、インスタントラーメン。夜は交代で食事を作った。保母さんが、仕事を早目に切りあげて、炊事番を引き受けることが多くなった。自然の成り行きだ。夜食が終って、九時ごろまで、屋内の作業が続く。それからミーティング、かならず次の段取りを決める。議論がふっとうして、二時、三時になることも、しばしばだった。

作業が始まると、職員だけの会議はなくなり、再建委員会と職員の合同会議になった。八人の職員のうち、一人の指導員と、若年の保母二人が脱落していった。それがかえって、五人の職員の団結をうながした。四年来の新しい養護実践のリーダーであった伊達指導員を頂点に、保母さんたちと卒園生たちの意思統一が組み立てられてゆく。

ひとつの、「行動する運命共同体」の誕生である。「成果があるかどうかを、十分にはかってから行動する」のではなく、「まず行動する。行動の中で、成果をつくりだしてゆく」のである。新しい価値観にもとづく、新しい行動綱領である。旧左翼の目からみれば、過激派とうつるであろう。事実、そういう非難、中傷、ためにするデマが集中した。支援して当り前の団体が、そっぽを向いたりした。だが、トンキーは、鼻の先で笑いとばした。「ヨヨギもハンヨヨギもあるもんか。おれたちは、ただ、学園を再建するだけさ」。

もう帰らない

先を急ごう。善意の市民の支援も受けて、

仮り住まいは完成する。「運命共同体」のエネルギーは、市へ向かう。ここでも、マタンキ団が先頭に立った。私は、三十年間も新聞記者をしているが、こんな激しい交渉は、見たこともなければ、きいた覚えもない。労働組合運動や学生運動の中の交渉も激しい。だが、どんなに鋭いことばが飛び出しても、労組のばあい、どこか馴れあいの気がちらつき、学生のばあい、甘ったれエリート意識がうごめく。強いて似たものを挙げれば、水俣病患者の東京交渉だけである。

マンボたちのことばは、きわめて乱暴であった。しかし、真情にあふれていた。こどもは品物なのか、人間なのか。人間ならば、最低限の主張がある。それを認めろというのだ。「最低限の主張」とは、私には、「人間向上の権利」と受けとれた。マンボやトンキーたちは、まかりまちがえば、教護院送りという、決定的な危険を冒して、施設内での人間向上の道を切り開いてきた。いまの伸愛のこどもたちが、それを受けついでいる。火事で散らされた。マンボたちにいわせれば、人間向上(はい上がりという方が正確だ)が停止したのではなく、逆転しているのである。伸愛が無くなり、こどもたちが消えてしまうことは、自分たちが十八年間生きてきた「あかし」が消えることでもあるのだ。こどもたちの全人格にかかわることは、とりもなおさず、自分たちの全人格にかかわることなのだ。

私は、彼らの交渉を見ていて、そう理解した。そして感動した。伊達指導員(こどもたちも卒園生も、けっしてダテセンセイとは呼ばない。ダテチョウまたはダテッチョである)は、彼らの「恨みを晴らす闘い」だと書いた。私もそう思う。怨念の噴出である。最も根源的なところで、人間の解放を求め、人間の尊厳を訴えているのである。労働や学生運動にない重味を感じさせるのは、そのためなのだ。

市が折れた。というより、ほかに対応のしかたがなかったのだ。十二月二十五日、こどもを呼び返して、クリスマスパーティーを開き、一泊してもよいとなる。火事からちょうど三か月目だ。歓喜の一夜が明けて、こどもたちは、「もう帰らない。ここにいる」といいだす。くわしく書く余裕はないが、こども、保母さん、卒園生たちの奇妙な共同生活——弓子のいう「いちばんおもしろい、いちばんおもしろい」学園が、実質的に再開する。無ソチのまま。一月、二月と過ぎる。こどもたちは元気いっぱいだ。マンボたちが作りだし、ダテッチョや保母さんたちが支えてくれた自由——私たちからみれば、小さな悲しい自由を満きつしている。

伸愛の保母さんたち

話を、はじめの保母さんへもどそう。こどもが帰ってからはもちろん、焼け跡片づけのガタガタした時にも、首を切られて給料もない保母さんが、よく外出するのを見た。それが、こどもの父親や母親を訪ねているのだと知ったのは、だいぶたってからであった。ある晩、保母さんと卒園生が、学園近くで安い下宿がないか、相談しているのを聞いた。夫に蒸発されて、こどもを手離した母親を、学園のそばに住まわせ、とりあえず生活保護を受けさせる。そして在園のこどもと接触させ、切れた母子のキズナを回復する。たとえ絹のように細い糸でもよい。生活の道さえつけば、糸はやがてパイプに変わる……。そういう計画だったのである。

施設へ来る子のほとんどが、片親である。残された父親、母親のほとんどが、アル中、薬中、無気力状態に陥る。人の子の父親や母親が、そうなるまでには、語りきれぬ歴史が

あるに違いない。しかも、責任のまったくないこどもが、幼い体に、その歴史をぜんぶ背負わされ、学園へ送りこまれてくるのだ。自分の心を閉ざしたままで。

こどもが保母さんの前で、自分の心を開くまでには、長い時間がかかるという。ある男の子は、公金を持ち逃げした父親のことを語るまでに、二年かかったという。しかし、いったん心を開いたあとの、こどもと保母さんのパイプは、強く太く、文字通り血の通うものとなる。私が焼け跡で、最初に衝撃を受けた「保母の愛情」は、このパイプだったのだ。

保母さんたちは、このパイプを、否定はしない。だが、これを、自分の行動の終点にもしない。このパイプをもとにして、こどもといっしょに、父親や母親へ立ち向かうのである。親と子へ、同じパイプを、つらぬこうとするのだ。伸愛学園は、伸愛学園の敷地内、建物内だけにあるのではない。指導員・保母さんを起点に、こどもたちがつながり、その先に、父親、母親、きょうだいたちが、切れたり結ばれたりしている。いわば、分子構造の模型のようなものが、でき上がっているのだ。保母さんたちは、ガラス細工のような細い管を、こわされても、こわされても、伸ばし続けるのである。

だから、保母さんたちは、こどもたちを荷物のように発送し転送したことを、全身全霊で怒る。体を張ってでも、こどもの分散を防ごうとするのである。自分たちが作り上げたものすべてが、一瞬に瓦解してしまうからだ。自分の首よりも、まず、そちらが問題なのである。こどもにさわったこともない理事長兼園長や当局者が、「なぜ伸愛にこだわるのか」「ほかの施設へ就職あっせんしてやる」「何年かのちに再建したら、また新しいこどもを相手にして働けばよい」などというたびに、いらだち、腹の底から、怒りと悲しみを感じるのだ。

恥ずかしいことだが、私も、保母さんの「のめりこみ」の実体を認識するのに、二か月かかった。そして、あらためて、衝撃を受けた。伸愛の保母さんたちは、日本のソチ的福祉政策の、はるか前方を歩いていたのだ。

こう書いてくると、読者の皆さんは、伸愛の保母さんたちを、まるで女神のような、あるいは、スーパーレディのように想像するかもしれない。まったく違う。ごく普通の、安月給で質素な婦人たちに過ぎない。叱っても、こどもたちがきかぬ時は、ヒス気味になる。こどもにそっぽ向かれては、くさる。養護とは何ぞや、福祉とは何ぞや、しょっちゅう、懐疑に陥る。だが、カゼで寝ている子に、「先生、おカユが食べたい」、遅くまで勉強していた子に、「先生、ラーメン作って」と甘えられた時、その時のトロトロとした横顔は、なんとも幸せそうで美しい。

彼女たちはいう。「自由化事件いらい、職員の数もふえました。同時に、指導員と保母との間に、仕事の差がなくなりました。指導員も、同じ人数だけ、受け持ちます。だから、以前十人以上だったのが、平均五人になりました。こどもとのつながりは、どんどん深まりました。しかし、深まれば深まるほど、私たちは、何か違うもの、どうにもならぬものに突き当りました。ほんとうの親ではないからです。だから、私たちは、こどもを愛すれば愛するほど、親を探し出し、ほんもののキズナを復原してやろうという気になりました」

受け持ち人数が少なければ、こどもに自由をあたえることができる。お互いの信頼が深まるからだ。しかし受け持ち人数が多ければ、保母さんは、いやでも管理者になってゆく。規則と時間割りにはめこんで、一括管理すれば、目も届くし、仕事としての安全も保てる。

しかし、こういう施設の保母さんは、一、二年でやめてしまう。おもしろくないからだ。こどもに自由を与えるためには、指導員や保母さんが、まず自分の自由を獲得する必要があるのだ。それを恐れていては、やがて、自分も、伸愛をつぶす側に廻らねばならなくなる。

ほとんどの施設の職員が、労働組合もつくれずにいる。組合を持った伸愛でさえ、労働協約がない。こどもにさわったこともない理事長兼園長が、簡単に、一方的に首切り通告をしてくる。こどもの顔も名前も知らぬ理事の理事会が、施設運営の全権限をにぎる。あまりにも、前近代的な閉鎖社会であることに、驚かざるをえなかった。

「ともかくも、こどもたちを帰してくれ。理事会の説得なんか、そのあとで、ゆっくりやればよい」——市との交渉で、卒園生たちが、血の叫びを繰り返した。その時、一人の役人が、大声をあげた。「君たちの要求を通すためには、日本国憲法を改正しなければならない」と。私は、日本国憲法が、人類の理想を体現したものだなどとは、ユメにも思わない。しかしまた、日本国憲法が、こどもにさわったこともない理事長兼園長や、こどもの顔も名前も知らない理事の理事会を守るために、こどもたちのしあわせを踏みにじることを命じているなどとは、絶対に思わない。そんなに下らないものだとは考えない。

＊

伸愛学園の焼け跡で、保母さんや卒園生たちが、体を張って示した「真実」が圧殺されるならば、日本のソチ的、ソチ式福祉政策には、なんの変化も起きないだろう。しかし、もし「真実」が認められるならば、ソチ的、ソチ式福祉政策にも、新しい人間的展望が開けてくるに違いない。そうなってほしい。

＊

四年前ホンノスコシノ自由を手にした時
何か作り出そうと烽台を作った
伸愛が火事なにって
みんながバラバラにされた
みんなが伸愛で生活を始めた時
すでに三か月がすぎていた
四年前をみつめよう
生活することが苦にならないように
四年前がみんなの前に見えた時
そこから伸愛は生まれ変わる

（在園生機関誌『烽台』再刊のことば）

伸愛の保母さんたち

日本への三下り半

日本国家や日本人のいやなところへ三下り半を書いてほしい——というお話ですが、本気で書く気になったら、三十枚や五十枚の去り状ではとてもとても足りません。それほど、〈女〉にとってはこの日本という社会は生きにくく、絶縁したくなるものばかり多いのです。そんなにも多く縁切りしたいもののあるなかで最大の対象はといえば、それは〈資本〉と〈男性〉ということになるでしょうが、わたしの選んだ〈底辺女性史〉という主題は、実はそのふたつに対するわたしなりの三下り半のつもりなので、ここには、それらと関連してはいるけれど少し別なことについて書いてみたいと思います——

この上なく地味な研究をやっているので無名だったわたしが、ノンフィクション賞を受賞したことで少し市場価値が出てきたらしく、最近ときどきテレビやラジオに出演を頼まれます。たいていは断ってしまうのですが、驚くのは、「出演料はいかほどですか」と訊ねたときの依頼者の返事です。どのテレビ局も、申し合せたように、「山崎先生は、どちらの大学の、教授ですか助教授ですかそれとも講師ですか？ 実は、肩書によってランクができておりまして——」というのです。

学歴帝国

山崎朋子

はじめわたしは、大学でもっとも冷遇されているのだから講師の出演料が一番高く、比較的に恵まれている教授のそれが一等安いのかと思いましたが、実は全く反対でした。学者の世界がものすごい学閥社会であり、官僚界や経済界がすさまじい学歴社会であることは言うまでもなく、そんななかでわたしは、ジャーナリズムの世界だけは学歴・学閥偏重主義から解放されていると思っていたのですが、「ジャーナリズムよ、お前もか」だったというわけです。

わたしは、学歴偏重主義をなくさなければ、人間の本当の価値というものは見えてこないと思っています。そして、学歴偏重主義のものの観方や考え方は、個人の自覚や思想的自己変革に待っていても、絶対に変わるものでないと考えます。たったひとつ有効な方法は、小学校から大学に至るまでのありとあらゆる学校が、成績もつけないし卒業証書も出さないようにすることでしょう。そうすれば、「おれは東大を出たんだ」と威張ったって、それを証明するものは何ひとつないわけで、世間は半信半疑、結局その人の実力で評価するほかはなくなり、三十年もたてば学歴社会の色彩はかなり薄れるだろうと思います。

わたしの夫は西村伊作のつくった文化学院を出ていますが、この学校は文部省の学校法令に準拠していないので、卒業しても〈資格〉というものが附きません。羽仁もと子の建てた自由学園も同じだったはずですが、今よりもっと学歴偏重だった大正時代に、そういう学校を建てることで日本社会に三下り半をつきつけた先達を、立派だったなあーとあらためて思うのです。

日本への三下り半

日本へ「三下り半」を突きつけろと言うことですが、そもそも「三下り半」などと申すものは、気に入らない相手に出すものでありまして、惚れた女房に出せるべき筋合いのものではありません。それを編集部は出せとおっしゃる。この企画を思いつかれた方々は、よほど日本という国が悪妻であると考えておられるに違いありません。しかし、それは大間違いなのです。日本及び日本人は、とても愛らしくて柔順な思いやりのある良妻なのです。その日本及び日本人に、どうして、「三下り半」を突きつけるなどムゴいことが出来ましょうか。編集部さんは何か思い違いをなさってるに相違ありません。二、三の例をあげて、その心得違いを正してみたいと思います。

例えば税金の問題です。重税だ、所得がありさえすれば何にでも税金がかかってくると不平を洩らされる方もいますが、そんなことはありません。その証拠に、政治家は、何億何百億お金を集めようが、それが日本及び日本人を倖せにする崇高な理念の政治に使われている限り一

日本、このできすぎた国

青島幸男

銭の税金もかかりません。政治家の政治資金はそうなってるかもしれないがと反論される方もあるでしょう。が、よく考えていただきたい。世の為人の為尽すことを毎日念じている政治家はともかく、一般庶民大衆などというものは、使いなれぬお金を持たしておくと、つい女に入れあげてダマされる、はたまた競輪競馬バクチの類に手を出してスッカラカンとなって一家離散の憂目に逢う、一家離散ならまだしも、一家心中などという悲劇を起しやすいものです。又、お金があれば人間うまいものを喰べがちです。美食は健康に大変宜しくない、糖尿病などを起す危険性があるのです。それやこれやを見越して、庶民が一家心中など起さぬように、そして又糖尿病などという恐しい病気にかからぬよう政府は気を配って、庶民大衆には大金を持たせぬように税金をとってくれているのです。こんなに国民の為を思う国が世界中どこにあるでしょう。重税だなどと言っては罰があたります。

又、日本人は、とても素直で優しくて思いやりのある国民です。とはいうものの、時々腹を立てて、デモをしたり不平を言ったりします。でも人間ですからそのくらいは仕方ありますまい。物価が高いとか政府が悪いとか不平を言っても、決して反乱を起したり暴動を起して、政府をテンプクさせるというような粗暴な国民ではありません。ちょっとブツブツ言いますが、飴玉の一つもしゃぶらせれば、すぐ大人しくなります。何と柔順な人たちなのでしょう。大企業と政府が馴れ合いで政治をやっていることは薄々感じながらも、そんなことを公けに叫んで造反することは、実にハシタないことであるとして、選挙の時はちゃんと自民党に一票を入れる心優しく賢い人たちの集りなのです。

そんな素直な人たちに、物事を斜に見たり、まず疑ってかかれなどと教えてはいけません。まして「三下り半」を突きつけろなどということは金輪際おっしゃるものではありません。